http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.246　17/07/06

ＳＦの歴史

（前号から続く）　ローマクラブ報告が「成長の限界」を訴え、ダニエル・ベルが『脱工業社会の到来』を書き、ニューエイジやエコロジーやポストモダニズムなど、近代の価値観を疑う思想があちこちから生まれてきた。宇宙と未来への懐疑もそのなかから生まれている。

ＳＦ作家はここでむずかしい選択を迫られることになった。ひとことで言えば、もはや異化作用がないことを知りつつ宇宙や未来にこだわるか(つまりＳＦがファンタジーになってしまうことを許容するか)、それとも新たな文学的フロンティアを探すのか、どちらかを迫られたのである。そこで前者を確信犯的に選んだのが（小説ではないが）ジョージ・ルーカスの一九七七年の映画『スター・ウォーズ』である。同作の成功は一九八〇年代以降のＳＦの位置を決定的に変えてしまい、日本でもアニメやライトノベルへとつながっていくのだが、それについて語るのは別の機会に譲りたい。ここで重要なのは、そこで後者を選んだ作家たちがいたということである。Ｊ・Ｇ・バラード、ブライアン・オールディス、サミュエル・Ｒ・ディレイニー、トマス・ディッシュといった作家たちで、彼らはまとめて「ニューウェーブ」と呼ばれる。のち取りあげるフィリップ・Ｋ・ディックも、このグループに分類されることがある。

ニューウェーブの作家たちの傾向は、しばしば、宇宙(アウタースペース)から内宇宙(インナースペース)へという言葉で語られる。彼らは未来世界や宇宙の描写よりも、むしろ登場人物の内面や幻想を重視した。つまり内宇宙とは心のことなのだが、ここでそれが空間（スペース）の比喩ともなっているとに注意されたい。ＳＦ作家はそこで、未来、宇宙に次ぐ、第三の異化の舞台＝空間を発明したのである。この運動からはいくつもの傑作が現れた。とはいえ、内宇宙を描くとはつまり、心を描くということなので、純文学(主流文学)の文体に近づくことにもなる。それゆえ彼らの作品は、批評家にこそ高い評価を得ているが、黄金期の作家に比べると娯楽性が落ちる。読者も、ニューウェーブの作家の名前にはいまひとつ親しみがないことだろう　さて、このようにジャンルＳＦの歴史をたどると、サイバースペースという言葉がなぜ一九八〇年代に生みだされることになったのか、その背景を具体的に理解することができる。ＳＦ作家は異世界を必要としていた。しかし、宇宙と未来はすでに古く、内宇宙は娯楽性に欠けていた。そのような状況のなかで、サイバースペースはまさに、宇宙や未来ほどには古びておらず、かといって内宇宙のように不自由ではない、第四の異化の舞台＝空間として現れたのである。この新しい舞台＝空間の発明は、それから長いあいだＳＦの想像力を活性化することになった。サイバーパンクそのものが流行したのは一九八〇年代後半だが、影響力ははるかに長く続いている。前掲の『攻殻機動隊』ですら一九九五年の作品だが、映像の世界では、サイバースペースの想像力は、さらに遠く、一九九九年のウォシャウスキー兄弟(当時)による映画『マトリックス』でようやく頂点に達したと言ってよい。サイバースペースの発明は、じつに二〇年にわたりＳＦを延命させたのだ。

（東浩紀『ゲンロン０』genron 、2017）

＊

「サイバースペース」という概念の誕生がＳＦを延命させたという分析は、「スターウォーズ」や「マトリックス」「攻殻機動隊」といった映画ヒット作誕生の背景分析とも連動してとても興味深い。社会学の分野にはこういう世界もあるのである。